

本誌で、寄付依頼および教育里親呼びかけを致します

地元貢献する人材を育てたい！

若者たちの夢を実現するために、教育里子の選考基準を考えよう！！

C.P.I.と現地協力団体 PPKIJ の活動が、来年で 24 年目を迎えます。20 歳台と若いエネルギーで取りくんで下さった PPKIJ のリーダーたちも、40 歳の後半に入ってきました。実力はついていますが、マンネリ化も否めません。この間に、里子会からアシスタントとして育ってきた若武者たちは、30 歳台になり、次世代リーダーとして、彼らの意見が大切になってきました。

医者や技術者となった卒業生からは、
「C.P.I.の奨学金は、大変ありがたかった」
との声が多く聞かれ、嬉しいことです。しかし一方、地域に根をおろした学校教師や、地域の企業に入った卒業生たちからは、
「いまの選考基準には入れないが、奨学金で育ててみたい子どもたちがいる。選考基準を地域によって検討し直せないか」との声もあります。

以下、どのような選考がよいか考えてみましょう。

■ 地元企業で、技術を発揮したい学生たち

チアンジュールの
専門学校の教育
里子たち。椅子が
壊れているが、
表情は明るい。
(2010 年度)



チアンジュール、PPKIJ の専門学校の生徒たち

上の写真の子どもたちは、C.P.I.と PPKIJ の専門高等学校(コミュニティカレッジと称している)で勉強している。学生数は約 270 名。1998 年に建設したチアンジュールの施設を利用して設立し、薬剤師養成講座を設けた。
「地元企業で技術を発揮したい」との声に応えたもの。
なお、三分の一の学生が教育里子である。

ご協力お願いします

インドネシア語を含む四力国語版の、レベルの高い折紙テキスト(日本折紙協会)を、二二〇校に五二八冊頒布できています。有難うございます。

また、同協賛寄付(一冊千五百円)から、経費を除く全額をもって母子家庭の救援活動を行っています。

この救援は、インドネシア女性組合との協定により、マイクロファイナンスと能力開発を進めているものです。

本年三月十日に開始しました。

C.P.I.の会員の皆様には、この活動にご協力を頂きたく、以下の要領で、申込をお願いします。

同封の郵便振込み申込書に、
ご記入頂き、お振込み下さい。
テキストの国内郵送または現地配布を行います。



■ 地元の農業を向上させたい学生たち

インドネシアでは、土地なし農民の課題が大きい。彼らは、要するに生活のために無理をしている。そのため、山地においては勝手に木を伐って売り、適当に農地をつくって野菜などをつくり、その開墾は秩序だっていないため乱開発となる。

そのやり方は、当然山林の衰退を招き、水資源の枯渇の原因となるとともに、下流の人々にとっては洪水の危険を生じている。彼らは、これまで、灌漑設備なしに開墾してきたので、結局は生活の向上につながっていなかった。こういう状況では、いかに上流にダムをつくり、下流で防波堤を設けても、根本的解決につながらない。

C.P.I.は、中部ジャワ・スマランで、2000～2015年の期間の長期にわたる協定を地方政府と結び、高地の課題解決のモデルケースをつくってきた。

資金的には、世界銀行の運用するJSDF(日本社会開発基金)を2005年から導入し、中央政府内務省も政府予算を投入して、このプロジェクトを支援して下さっている。

いまでは、このモデルケースは、インドネシアの他の地方によく知られるようになった。詳しくノウハウ導入を図りたいという地方政府は、東ジャワ・西部ジャワからの問い合わせをスマラン政府に行っており、スマランの『成功した元・土地なし農民』の代表は、説明役を引き受けている。

これは、このモデルケースが、「住民参加型開発」事例として成功したことを物語っていると言える。

C.P.I.の小西会長。
プロジェクトの現場では
農民たちが造った集会
の場で、彼らの心尽くし
の料理で話し合いが
もたれる。



JSDF プロジェクト。

土地なし農民の課題の
解決は、水資源・土地
利用の適正を推進する。
これは、プロジェクトの
主体である、果樹の植林。
政府は土地を提供した。



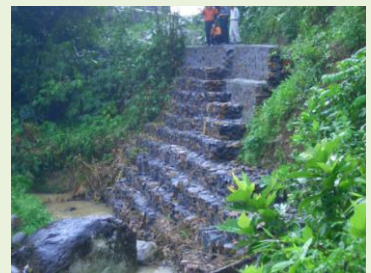
JSDF プロジェクト。

農民が自ら管理した
適切な農業を進めるには、
高度な知識と知恵を
もつ人が必要である。
組合リーダーの、
C.P.I.会長とテムディ氏。



JSDF プロジェクト。

15年以上も放置され
孤立していた山村に、
山村無償援助を行った、
道路を造成し、
農作物の市場への
運搬が可能になった



JSDF プロジェクト。

これも、36村で行われた
農村改良活動。一村には
わずか50万円の援助だが
村人総出で労働を提供し
長年の夢だった灌漑用水
を造り上げた。



地方の山村出身の高校生のなかには、こうした活動に将来の夢を託したい学生がいる。彼らを対象に、教育里子プログラムはどうか。

地方の山村出身のその学生たちは、これまでは自分たちの境遇にあきらめをもっていたところ、希望が見えてきたということだろう。

彼らを如何にして勇気づけていくか、ということになると、教育里子プログラムは正に、「あてはまる」のだ。中部ジャワのプロジェクトサイトでの研修も可能だ。従って、そのようなケースのために、従来の奨学生選考対象学校の枠を広げて、地域によっては農業高校の学生を重点的に選考することが必要と考えられる。

■ 『非常に貧しい家庭にいるが、勉学意欲の高い学生を支援する』との奨学趣旨を守りたい

問題は、ここきて大学入学の費用が高騰しており、最近、選考する学生の家庭経済の判定基準が、ゆるくなっていることだ。つまり『経済的にやや困っている』という程度の学生を選んでしまう傾向にあった。

そうすると、「非常に貧しいが勉学意欲が高い学生を支援する」というC.P.I.の奨学制度の趣旨から外れてくることになる。

そこで、選考の補正をすべきだということだ。

例えば、従来ジャグジャカルタは、ガジャマダ大学(日本で言えば、京都大学に相当する位置にある)をはじめとして大学が多い街である。

だから、大学生にしたい学生(普通の勉強で成績がいい)を主として選考してきた。

そのジョグジャカルタでも、地域リーダーから、昨年、「選考基準を変えたらどうか」との提案があった。「貧困家庭の女子が高校を卒業することを目的に、女子の選考を増やしたい」とある。ジョグジャカルタのリーダーが支援効果をあげたいと考える理由は、次の三点だ。

1. 女子の方が、手の職をもつ意欲が強い、忍耐がある、独立してほかの困窮者を助けながら仕事をしていく例も多い。支援のしがいがある。
2. 女性の起業家が多く、ジョイントしやすい。
3. それにしても、会社に勤めるとき、高校を出ていないと難しいので。そうしたハンディを助けたい。

全国的にも、従来、比較的少ない入学費および学費だった国立大学入学の学生を支援してきたが、それが高くなってきたために、この課題が出てきている。

2012年には、とくにこの課題への取り組みが必要な、都市郊外の選考地域の基準を補正することを考えたい。ジョグジャカルタもそのひとつということだ。

ただし、いまの奨学生たちは、大学を目指している者が多いので、徐々に補正していく必要がある。

また、これまでの状況では、教育里子のリーダーとして、あるいは卒業里子会の中心となって活動する者は、大学生または大学卒業者である。そのあたりのことも考えていかなければならない。相当に悩める局面ではある。

ジャカルタやボゴールの教育里子は、日本語クラスに、伝統音楽クラスに、熱心に参加しており、模範的な学生たちだ。



ジョグジャカルタ。女性の起業が盛ん。バイオ関連で、自然の材料から工業製品を産み出す等。従って、女性の人材育成がやりやすい。

スマランの里子。山村振興プロジェクトでも活躍した。山村の子ども支援を高めたいが、大学へ進学する里子の率も高い。



マランの里子。工業地帯が近いので、実務を学びたい学生が多い。工業高校の学生を支援の方がよいと考えられる。

プミアユの里子。地域のために貢献したい学生多い。近くに病院が多いので看護婦さんになる子も結構います。



ジュンベルの里子。農業でも工業でも革新的な地域。そちらの方面でやる気がある人材育成が求められている。

中央政府と国際NGOの合同会議が行われました

小西会長からの寄稿



2011年11月16～18日、インドネシア中央政府で地方住民生活の向上と内政統括を担当する内務省の国際協力局と、国際NGOの代表との活動評価会議が開催された。政府側は、地方からも含め約50名参加。C.P.I.Japanは、日本の代表NGOとして唯一の招待を受け、他の招待団体は次のとおりであった。

CARE International

Plan International

Islamic Relief Worldwide

Vredeseilanden (VECO)

Arbieter Samariter Bund Deutschland e.V. (ASB)

International Organization for Development Cooperation

Caritas Switzerland

Partner AID International

顔ぶれは、世界的に忽々たるメンバーである。

第一回の会合から、C.P.I.の教育里親プログラムは、「小さいが美しい活動」との評価を戴いていた。

今回は、地方住民の生活向上に係わる活動評価を主な目的としていた。

会議での成果の一端をお知らせしたい。

次ページで、C.P.I.からの発表内容を報告する。

■ 資金の手当先はグローバル化している

発表を聞いていると、ひとつのプロジェクトに掛る費用が、5千万円～三億円が平均であった。

その資金は、カナダ・オーストラリア・スイス・オランダ・米国等の政府系資金提供機関、あるいはユニセフなど国際機関から、グローバルな調達で賄われている。その方法を、尋ねてみたところ、示唆に富んでいた。

「資金提供国政府の、インドネシアに対する政策が、対NGO支援に反映しているから」とのこと。国際NGOとしては、各国の政策をよく研究して、案件提起をしているわけだが、それを受けて支援している各国政府の懐の深さを、いまさらながら感じる。

C.P.I. Japanの場合、世界銀行からの資金調達で地域社会の向上を図った実績が評価されての、今回の会議招待につながったのだが、他の団体の調達方法を勉強し、またそれら機関の紹介を戴く機会となるこの会議は、相当に有意義なものとなった。

Partner AID の
インドネシア代表の
発表の様子。
(ドイツの方です)



■ ユニークな活動をしている、Partner AID

そのような全体的な雰囲気の中、Partner AIDの活動はなかなかユニークで、取りあげてみたい。

1. 学校に『健康を守る玉手箱』を配った。
2. その中の歯磨きセットを使った『歯磨き促進』を、5034名の子どもを対象に行なった。
3. この活動は、歯医者さんを派遣してのものだ。

なるほど、と感心していると、隣にいたIslamic Relief Worldwideのアリヌールさん曰く、

「私も歯医者だが、あれはやりたいね」

と、関心を示していた。

私たちも、日本の歯医者さんに呼びかけて、C.P.I.の現地ネットワークにある学校(約200校ある)で、実施してみたいものだと思います、パートナーAIDのアグンさんに、健康パックの詳細を教えてくださいと頼むと、即座により返事をもらうことができた。

国際NGO同士の関係はとてもためになる。

国際NGO合同会議でのC.P.I.からの発表

■ 国際交流と国際協力とは、両輪の関係

C.P.I.の活動は、1979年から国際交流として始めた。1988年から国際協力との両輪として位置づけている。国際協力では、手を携える関係者との間で潤滑油が必要となる。交流は、そのような役割を果たす。例えば、C.P.I.は、2008年に東京でのインドネシアフェスティバルをインドネシア政府内務省と共催して発起し、また、ジャカルタで日本折り紙フェスティバルを、2009年に開催した。これらは、互いの国の文化交流につながるものだが、当会にとっては、インドネシアの代表的な女性団体である女性会議(KOWANI)、女性組合(KOPWANI)、女性起業家協会(IWAPI)との関係を築くものであった。国際交流は、以下に述べる活動の関係者間を円滑にする役割もあるということだ。

左から五人目
国際協力局長
サウト氏。
左から三人目
小西会長。



母子家庭救援プロジェクトは、インドネシア女性組合(KOPWANI)との協定により行なっているものである。同組合とは、ジェンダー活動で協力しあっている。また、能力開発の応用として、南スラウェシ州のマカッサル市で、交通安全調査を、高校生組織等と手を携えて行う仕事を、地元の大学と手を組んで始めた。
(本件は、P6～P7で、別途報告する)。

■ 教育支援 プログラム は信頼の礎

PPKIJをカウンターパートとして行なわれている教育支援プログラムは、教育里親によって支えられている。中学3年生から大学2年生までの期間の勉学を支援している。これまでは、貧困家庭での勉学熱心な学生への学習継続に焦点をあててきた。これからは、地域向上をも視野にいたれた人材育成の観点から、支援学生を選んでいきたいと考えている。同時に、地域向上に適した学校建設あるいは特別カリキュラムの導入の手伝いも行なっている。すでにチアンジュールでのコミュニティカレッジ創設、南スラウェシでの中学校がない島々への中学校建設に手を貸している。

■ 他の NGO と連携する能力開発プロジェクト

教育支援活動は、学生に対しての能力開発といえる。ところで、こうしたことを行なっていく過程で、私たちは、災害にあって男手を亡くした母子家庭の子どもが、勉学支援以前の状態から抜け出せないでいることを知り、そのような家庭の女性への能力開発とマイクロファイナンスを組み合わせたプロジェクトを始めた。

■ 貧困地域は、住民参加型開発で

最貧困の住民に新しい組合を組織してもらい、『住民参加型のプロジェクト』を、住民組合—NGO—地方府の三者ユニットを形成して進めている。すでに、中部ジャワ・スマラン市での高地果樹植林を土地なし農民を組織して行い、JSDF(日本社会開発基金)を運用している世界銀行と連携した。中部ジャワでは、引き続きスマラン郊外市において、同様のプロジェクト形成にかかっている。

■ 受益者参加型の活動は生きてくる

これらのプロジェクトの要点は、受益者が活動を自分たち自身のことと考え、活動をより前進させるため自ら計画することになることだ。そしてさらに、成果を他の地域の住民に伝えるようになることが願いだ。はじめは手取り足取りの遅々とした進み方であったが3年も経つと勢いがついた。その後の波及は大きい。

私たちは、受益者が、私たちを、共に歩み共に政府と交渉してくれる仲間とってくれていることを、知っている。私たちにとって大きな喜びであり、励みである。

新しい視点から交通安全を実現するために

■ 教育里子を交通事故で失いたくない

わずか10年前、下の写真は、東ジャワのマラン市内の道路風景だ。

緑豊かな沿道、車もバイクもたいして多くはない。

路地も貧しい人が多く住んでいたから、彼らは互いの生活を少しでもよくするために道を清潔にしていた。

何も、みんながバイクを持つ必要もなかったし、第一高くてそうそう買えなかったから、用事のあるときはペテペテ(小さい乗合バス)のあるところまで、オジェック(近場のバイクたくしー)または、近所の人のバイクに乗せてもらい、出かけていた。

弱者の交通事故は、そんなに多くはなかった。



ところが、とくに日本のメーカーが頑張ってバイク普及に努め、いまでは誰でもバイクを買えてしまう。

免許も、道路事情におかまいなく、極めて簡単に取れてしまう。

よき時代の『ご近所に頼む』風習はなくなり、「あなたのバイクで行ってね」となる。

若者には、もちろん便利な足でもあり、荷物を運ぶ道具でもある。家具まで運んでしまう。

むろん二人乗りで、後ろに座る者が持つのだ。

子ども連れの4人乗りも、仕方がないから、する。

このような走行は安定が悪く、いきおい事故は増える。

「死ぬまで、死ぬことはわからない」ということだ。

私個人で経験した限りでも、活発的な教育里子のリーダー男女一名ずつを失った。

教育支援をしてきた子どもが、交通事故で亡くなることのないようにしたいと、悲しみと怒りを心の奥に沈め、誓ったものである。

■ 一昨年から吹き始めた、活動への追い風

2009年、国連の交通安全アクション委員会は、「交通安全は、貧しい人々の課題を解決する主要な課題である。いかなる道路整備計画も、その費用の10%を交通安全対策に計上するべきだ」と警告した。いまこそ考えるべきは、次のようなことである。

1. 通行量が少ない地方の道路や、それに通じる村落の道路・路地などを改善できるか。
2. 道路アクセスをよくして就学率をあげられるか。
3. 子供がいる女性、または病気の人が、必要な場所に安心して行けるよう、公共交通機関のある主要道路にアクセスする方法を改善できるか。
4. 防災が効率よく行えるよう、道路の状況を改善できるか。
5. ややもするとインフラ整備の優先のために環境配慮にかける状況があるので、そのような課題に対策を行えるか。
6. 交通安全教育を幼児から徹底できるよう、啓蒙組織の活用を図ることができるか。
7. インフラ整備は、以上に配慮して行うべきだ。

■ 2011年9月、画期的なセミナーを開催

C.P.I.は、インドネシアにおける、交通安全に関する初めての国際セミナーを、2011年9月20日、南スラウェシ州マカッサルで開催し、日本から日本大学理工学部の交通問題研究所長・島崎敏一教授にご出席戴いた。

C.P.I.とモハマディア大学(マカッサル)の共催で行なったこのセミナーは結論から言えば大成功であった。



右から二人目
島崎教授

■ 活動は住民の運動にしてこそ成功する

交通安全セミナーの会場からの意見です。

若者グループを代表した発言があった。

「街ではペテペテ(乗合の小さいバス)が 2000 台以上ある。狭いところにも入ってくれて、便利ではある。

しかし、どこでも止まれるので、ときには急に道の端によることになり、バイクと衝突しそうになるので、怖いことが度々だ。

バイクも若い僕たちには便利だが、カーブを急速度で曲がる者、スネーク走行を自慢げにやる者がたくさんいて、危ないと思う。

自分たちは、政府からも責任をもらって、若い自分たちでルールをつくり、命を守る活動をしたいと考えているので、政府には、協議する場をつくってもらいたい」



学生女性会の代表からの発言。

「私たちは、どうしてもバイクの後ろに乗ることが多い。振り落とされて亡くなった友人もいる。

後ろから当てられて怪我した友人もいる。

バイクの専用レーンを造ってもらえば、事故が減る。

それから、子どものいる女性は、バイクの後ろに子どもと一緒に乗っている姿をよく見かける。

ときには、二人の子どもを連れて乗っていたりする。

赤ん坊を連れてペテペテの通りまで出るのが大変なので、バイクに無理してでも乗るようだ。

よい方法を一緒に考えてもらえるようにしたい。

今日の専門家のなかで、日本のされてきた施策を聞かせて頂いたが、日本は細かいことを考えて交通システムを作っているように思う。とても、ためになった」

■ 日本の『うまくいったやり方』を見直そう

また、ご老人のご意見も紹介します。

「バンドンの先生や、我マカッサルの先生から、『大きなバスや電車で、多くの人を運ぶように転換するべきだ』という話があった。

しかし、バイクや車が減るとはとても思えません。

日本の先生が言われたように、日本では交通教育を幼稚園のときからされているということに感銘を受けた。安全を守るのは、まず人の心だろうと思う」



こういうご意見を聞いていると、日本から島崎先生に出席して戴いてよかったと思う。

2007 から着手した、日本の専門家と地方政府・現地大学をつないで、人々の生きる環境の改善を図ろうとする C.P.I.の活動が、実を結んできたと感じる。

今後、現地の運輸省・教育省・公共活動省など省庁とも話し合いながら、高校生交通安全委員会などの若者組織との連携も図りつつ、よい方向にいけたらと考えている。

ちなみに、世界銀行が活動資金支援の意向を示してくださっており、ありがたいことだ。

日本のやり方、日本人の日常的に培ってきた社会性の良い部分を、もっと発信していきたいものだ。

こういう活動を推進している NPO への応援を、民間のみなさんも、日本政府も、応援して戴きたいと思う。

C.P.I.の会員さんのなかで、こうした活動にご参加を戴ける方には、本部に連絡をお願い致します。



インドネシア 現地事務所から

教育里親さん募集 にご協力下さい



ジャカルタにある C.P.I. の現地本部施設

C.P.I. 事務所に、全国から協力団体が集っています

2007 以来、C.P.I. の施設に集って下さる現地協力団体、あるいは地方政府の関係者は、着実に増えてきました。集まってくくださる方々の地域も、スマトラ、スラウェシ、東ジャワ、中部ジャワ、ジャカルタに本拠を置く女性団体、インドネシア漁業組合、インドネシア交通安全対策協会など、多岐にわたっております。

民間協力団体とのミーティング

C.P.I. が地域住民の向上プロジェクトで進めてきた、住民参加型の方法論にジョイントしたいとの協議が主なものでした。

2011 年に入り、8 月に、それらのうち民間協力団体が一同に会する、集まりを行いました。

みなさん、大きく事業活動を行なっている団体ですので、相互に協力し合えないかということでした。

日本の専門家のご協力も始まっています。『市民協力集いの場』として設けられた C.P.I. の施設を活かしていくことが軌道に乗り始めていると思います。

ところで、このような C.P.I. の求心力は、何といても、教育里子プログラム 23 年間の活動があるからです。

ですから、私たちは、教育里子プログラムを大切に、より発展させなければなりません。

今回の会報では、そのために今後どのようにすべきか、一緒に考えたいと思い、特集を組みました。



民間協力団体の集まり。C.P.I.施設の会議室にて



チアンジュールの寄宿舎付き学校。これは 2010 年に増設した校舎です（現地の自主財源で建設）。コミュニティカレッジとしての成功を図っています。

**C.P.I. の教育里子プログラムを発展させましょう。
C.P.I の教育支援を願っている子どもたちが、たくさんいます。
教育里親さんの募集にご協力ください。**